
春風美空

『零』

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春風美空

【Nコード】

N4941D

【作者名】

『零』

【あらすじ】

翔一は平凡な毎日に飽き飽きしていた。偶然思い出の場所に居た彼女と出会い、翔一は大きく成長していく

一章 『始まりの予感』

次の日・何となくだが、昨日会った彼女の事が気になった。と言つより気になりすぎて、あまり眠れなかった。

あの見透かすような目……

・今日逢えたら、何故そんな目で俺を見たのか聞いてみよう。

流石に連続で授業はサボれる訳がなく、今日は大人しく授業を受けた。帰りのHRが終わった瞬間、俺は『はぐれメタル』の如く学校を逃げ出した。

制服のまま俺は急いで、あの桜の木のある場所へ向かう。

あまり寝てないせいか・やや足取りが重い。

それでも俺は何とか辿り着く事が出来た。

桜の木の場所に・・彼女の姿は無かった。

翔一

『．．そりゃそうか．．何を俺は．．期待していたんだかな．．』

．
此処までほぼ走りっぱなしで流石に疲れたせいか、瞼が重い．．俺
は木に寄りかかり．．．そこで意識は、ブラックアウトした．．．

『．．．て』

『．．き．．て』

誰．．だ？俺を起こそうてしてるのは．．

『起きて．．』

翔一

『ん．．誰．．だ？』

俺は瞼をゆっくり上げる。ソコには．．

昨日会った彼女が目の前に居た。しかもウチの学校の制服を着て．．

？？？もしかして．．

翔一

『同じ学校の生徒？』

女性

『うん．．そう．．』

意外だった。何となく雰囲気大人びてて、彼女は俺より年上だと思っていた。

だが．．ホントは俺と同じ学校の生徒だった。

俺は頭を掻きながら、立ち上がる。

翔一

『．．自己紹介がまだだったよ、俺は秋山 翔一、宜しく。』

美空

『私は・・白風美空。宜しく、翔一君。』

互いに自己紹介をし、握手をする。

翔一

『美空はこの場所に良く来るの?』

美空

『ええ、桜の木が咲いている時は大体は此処にいるわ。』

そうだったのか・・でも何となく分かるかもな。此処は数年振りに来たけど、心が安らぐ。彼女もそれに惹かれて此処に来るんだと思う。

俺達は桜の木を見上げる。

風が花びらを散らせ、桜吹雪が起こる。

翔一

『しかし同じ学校の生徒だったとはね、意外だったな。』

美空

『・・・そうね』

また桜の木を見上げる。

・そう言えば俺は美空に聞きたい事があったんだ。

翔一

『そう言えば昨日見透かした目で俺を見たのは何故なんだ？』

美空は俯く。だがまた顔を上げ、俺の目を見る。

美空

『・アナタは・辛いの？』

翔一

『え？』

突然なんだ、急に。

俺が・辛そう？

・正直凶星だ。毎日が変化しない『色』、心が灰色な日々。

生きるのが・退屈で嫌だ。

翔一

『・・・どうして俺が辛そうだって分かったんだ？』

美空

『目を見れば大体は分かるの。それに．．表情を見れば、ね』

何時もそんな顔を俺はしてたのか．．．

美空

『余計なお世話だけど、待っているだけじゃ何も変わらないって思う．．何かを変えたいって思うのならまず自分が動かなくちゃ。』

翔一

『．．．そうだな』

美空の言う事は分かる。でも俺には．．．

翔一

『目標も夢もないんだぞ？そんな俺でも．．変わる事が出来るのか？』

美空は表情をほころばせ、俺を見る。

美空

『．．大丈夫、アナタは変わる事が出来るわ。もっと自分を信じて。』

翔一

『．．ああ、分かった。』

何の根拠があつて美空はそう言つたかは知らない。
でも俺はこの時背中を押されたような感覚だつた。

桜の木を眺めながら俺はそう思った

第二章 『END』

一章 『始まりの予感』（後書き）

駄文すぎて申し訳ないです（ノ・。・）

でも、そんな駄文でも最後まで読んでくれた皆さん。

大大大感謝です。

二章 『動き始めた歯車』

次の日・何となくだが、昨日会った彼女の事が気になった。と言つより気になりすぎて、あまり眠れなかった。

あの見透かすような目……

・今日逢えたら、何故そんな目で俺を見たのか聞いてみよう。

流石に連続で授業はサボれる訳がなく、今日は大人しく授業を受けた。帰りのHRが終わった瞬間、俺は『はぐれメタル』の如く学校を逃げ出した。

制服のまま俺は急いで、あの桜の木のある場所へ向かう。

あまり寝てないせいか・やや足取りが重い。

それでも俺は何とか辿り着く事が出来た。

桜の木の場所に・・彼女の姿は無かった。

翔一

『．．そりゃそうか．．何を俺は．．期待していたんだかな．．』

．
此処までほぼ走りっぱなしで流石に疲れたせいか、瞼が重い．．俺
は木に寄りかかり．．．そこで意識は、ブラックアウトした．．．

『．．．て』

『．．き．．て』

誰．．だ？俺を起こそうてしてるのは．．

『起きて．．』

翔一

『ん．．誰．．だ？』

俺は瞼をゆっくり上げる。ソコには．．

昨日会った彼女が目の前に居た。しかもウチの学校の制服を着て．．

？？？もしかして．．

翔一

『同じ学校の生徒？』

女性

『うん．．そう．．』

意外だった。何となく雰囲気大人びてて、彼女は俺より年上だと思っていた。

だが．．ホントは俺と同じ学校の生徒だった。

俺は頭を掻きながら、立ち上がる。

翔一

『．．自己紹介がまだだったよ、俺は秋山 翔一、宜しく。』

美空

『私は・・白風美空。宜しく、翔一君。』

互いに自己紹介をし、握手をする。

翔一

『美空はこの場所に良く来るの?』

美空

『ええ、桜の木が咲いている時は大体は此処にいるわ。』

そうだったのか・・でも何となく分かるかもな。此処は数年振りに来たけど、心が安らぐ。彼女もそれに惹かれて此処に来るんだと思う。

俺達は桜の木を見上げる。

風が花びらを散らせ、桜吹雪が起こる。

翔一

『しかし同じ学校の生徒だったとはね、意外だったな。』

美空

『・・・そうね』

また桜の木を見上げる。

・そう言えば俺は美空に聞きたい事があつたんだ。

翔一

『そう言えば昨日見透かした目で俺を見たのは何故なんだ？』

美空は俯く。だがまた顔を上げ、俺の目を見る。

美空

『・アナタは・辛いの？』

翔一

『え？』

突然なんだ、急に。

俺が・辛そう？

・正直凶星だ。毎日が変化しない『色』、心が灰色な日々。

生きるのが・退屈で嫌だ。

翔一

『・・・どうして俺が辛そうだって分かったんだ？』

美空

『目を見れば大体は分かるの。それに．．表情を見れば、ね』

何時もそんな顔を俺はしてたのか．．

美空

『余計なお世話だけど、待っているだけじゃ何も変わらないって思う．．何かを変えたいって思うのならまず自分が動かなくちゃ。』

翔一

『．．．そうだな』

美空の言う事は分かる。でも俺には．．

翔一

『目標も夢もないんだぞ？そんな俺でも．．変わる事が出来るのか？』

美空は表情をほころばせ、俺を見る。

美空

『．．大丈夫、アナタは変わる事が出来るわ。もっと自分を信じて。』

翔一

『．．ああ、分かった。』

何の根拠があつて美空はそう言つたかは知らない。
でも俺はこの時背中を押されたような感覚だつた。

桜の木を眺めながら俺はそう思った

第二章 『END』

二章 『動き始めた歯車』（後書き）

駄文ですが、読んでくれた人達・・・大感謝です（＾－＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4941d/>

春風美空

2010年10月9日02時25分発行